

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	竹田 恵子【論文博士】(比較社会文化学専攻 平成25年3月単位修得退学)	要 旨
論文題目	《S/N》(1994)における古橋悌二	<p>本論文は、京都において1990年代に活躍した「ダムタイプ dumb type」というアーティスト集団によって制作されたパフォーマンス《S/N》(1994)を対象作品として中心に取り上げ、また、その作品制作において中心的な役割を演じていた古橋悌二(1960-1995)については、そのパフォーマンスの中だけでなく、その制作のプロセスも含めて、《S/N》との関わりを、多面的な視点から明らかにするものである。古橋悌二は自らHIV/AIDSに感染し、1995年のサンパウロでの公演中に亡くなっている。この論文では、HIV/AIDSと正面から向き合い、マイノリティとしてのゲイやHIV/AIDS感染者が自らを「カミングアウト」という社会の軋轢の中でのアイデンティティの表出を、《S/N》というパフォーマンスとしての「アート」において、その有効性を検証し、作品構造の分析という美学的な方法と、ダム・タイプのメンバーへのインタビューをはじめとする何年にもわたるフィールドワーク、そして創作時の社会的文脈を雑誌や新聞記事などのメディア関連資料を用いて、その多面的な作品の姿を明らかにしている。</p> <p>論文の特に美学的な側面としては、第3章の引用を多用することで作品を構築すること、第4章で「カミングアウト」の仕掛け、第5章と第6章での古橋悌二自身の「テキスト性」、「作者性」となどについて、ミシェル・フーコーやポーラ・トライクラーなどの議論、共演者であったブブ・ド・ラ・マドレーヌなどの証言を交えて、同時代の思想的背景に配慮しながら、作品の位置づけを検証していたと言えよう。また、社会的側面としては、第1章で古橋悌二の経歴やダム・タイプの活動、および、90年代における京都のHIV/AIDSをめぐる市民活動が記されており、作品としての《S/N》のもつ社会的つながりについて述べられている。さらに第2章では、90年代の日本におけるエイズに関するメディアでの言説に着目し、当時の「エイズ・パニック」の現象と「男性同性愛者」の反応など、専門雑誌などを調査して、その状況を明らかにした。また、ここで、古橋悌二のいわゆる「手紙」と呼ばれる自己告白についても言及している。</p> <p>結章では、《S/N》が意味するところとしての、シグナルとノイズ、あるいは磁石のSとNなどの解釈とともに、流動化と固定化の両面を持って、磁石の中心にいる古橋の存在を、この作品とともに可能性として示した。</p>
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	准教授 中村 美奈子	
	教授 棚橋 訓	
	准教授 戸谷 陽子	
	横浜国立大学教授 小野 康男	